

「日本漢語（新名詞）」・中国の「現代性」・「一般思想史」 ——黄興濤氏の議論に触発されて

川尻文彦

黄興濤氏の「清末民初新名詞、新概念の「現代性」問題」は2005年3月6日に神戸大学瀧川記念館で行われた中国現代史研究会特別例会での講演原稿（当日の通訳は不肖川尻文彦）にその後、加筆修正をほどこしたものである。中国語原文は近々『天津社会科学』誌に掲載される予定と聞く。黄興濤氏は神戸大学の招きで2005年1月から3月にかけて日本に短期滞在し、研究活動を行うとともに、京都大学人文科学研究所（「晚清民初現代「文化」観念の興起及其歴史意蘊——以「文明」和「文化」新概念の形成与認同為中心的考論」）、国際日本文化研究センター等で講演を行った。

黄興濤氏は1965年生まれ、中国人民大学清史研究所副所長・教授。近代中国の思想文化史を専攻し、著書に『文化怪傑辜鴻銘』（中華書局、1995年）、『文化史的視野——黄興濤學術自選集』（福建教育出版社、2000年）、『辜鴻銘閑話——一個文化怪人的心靈世界』（広西師範大学出版社、2001年）、編訳著に『辜鴻銘文集』（上・下）（海南出版社、1996年）、『中国人的精神』（辜鴻銘著、海南出版社、1996年）、『中国人自画像』（陳季同著、貴州人民出版社、1999年）等がある。これを見ても辜鴻銘に関する著述が多く、黄氏の名は日本の研究者には辜鴻銘研究者として知られているのではないかと思われる。しかし、ご本人の言葉によれば10年ほど前に辜鴻銘研究は一区切りをつけ、もっぱら本報告にみえるような近代中国における新名詞、新概念に関わる研究に従事しているとのことである。その意味で本稿は黄氏の近年の研究関心を集大成したものであるといえる。

本稿の内容をごく簡単に要約すれば、さまざまな人がさまざまな形で論じている「現代性」(modernity)という概念の提示から始まり、さらに進んで黄氏が創案した概念である「思想現代性」(modernity of thinking and ideas)の問題の分析へと進む。黄氏は「思想現代性」の定義について詳しく述べ、5つのメルクマールを挙げる。要するに「思想」についての「現代性」である「思想現代性」があってはじめて「現代性」をおびた全面的な社会変革を行うことができるのである。清末民初に新名詞、新概念が大量に流入し、それらはしばしば強い「現代性」をおびていた。そのような新名詞、新概念の語彙の造語上の特徴およびそれらが中国に受容される過程でのさまざまな問題を考察する。また新名詞、新概念の

導入の際に「現代思想舞台」（黄氏の提起した概念）の果たした機能についても触れる。このような作業を通じて、「伝統」と「近代」との間によこたわる複雑な歴史的な関連の一端を解明している。この両者の関係性については「断裂式の拡充」などという新しい分析概念を提示する。最後に、新名詞の一つ「社会」の語を例に取りあげる。中国において現代性をおびた「社会」を受容する際に、「私」に対する「公」を重視したことにより、「国家」と「社会」との境界、対抗関係が曖昧になったことを中国的な特色として指摘している。

清末から民国初の時期に、西洋の学術、制度、文化等にかかわる意味内容を言い表す日本製漢語が大量に中国に流入し、中国語の語彙に大きな変化をもたらしたことはよく知られている。例えば、哲学、文学、歴史、社会、憲法、経済等々である。西洋に由来するありとあらゆる「近代」的な概念はすべて日本製漢語で表現されるようになり、中国に紹介されたといっても過言ではない。このような「日本漢語」を網羅的に扱ったものとしては、実藤恵秀（『中国人日本留学史』くろしお出版、1960年の第7章「日本語彙の中国語文へのとけこみ」等）、鈴木修次（『日本漢語と中国——漢字文化圏の近代化』中央公論社、1981年）らの古典的研究があり、今日でも参照するに足る力作である。近年の日本でも沈国威（『近代日中語彙交流史』笠間書房、1993年）、荒川清秀（『近代日中學術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社、1997年）らの着実な研究もある。中国本土でも本稿中で引用されているように、王立達の論文「現代漢語中従日語借来的詞彙」（『中国語文』1958年）をさきがけに本格的に研究がスタートし、同論文では558の日本漢語の借用を紹介した。高名凱・劉正燊『現代漢語外来詞研究』（文字改革出版社、1958年）の外来語研究の立場からの先駆的な研究も出、現代中国語の語彙の主要部分をなす1266以上の新造語を確認し、そのうちの459が日本漢語であると指摘した。実藤の研究もじつはこれらの研究を踏まえたものである。

ところが近年、イタリア人研究者マシーニ Federico Masini “*The Formation of Modern Chinese Lexicon Evolution to ward a Nation Language: The Period from 1840 to 1898*” *Journal of Chinese Linguistics Monograph Series No.6, 1993, Berkeley, U.S.A.*（中国語訳、馬西尼『現代漢語詞彙的形成：十九世紀漢語外来語研究』漢語大詞典出版社（上海）、1997年）によって従来日本製漢語であったと考えられてきたものの4分の1近くが、実は19世紀初頭に西洋人宣教師によって中国人アシスタントの協力のもと非宗教的なテキストの翻訳の過程で漢訳された造語であり、それらを日本人が「日本漢語」を造語する際に参考にしたという説が出された。これはまだ仮説の域を出ないし、実証面でもいくつかの疑問点が学者から出されている¹。しかし、英文資料の博搜に基づく彼の議論には説得力があり、この方面での研究にあらたに一石を投じた意義は大きく、多くの反響をよんだ。

これらの議論を踏まえた上で、「言語横断的な実践」という独自の観点から中国におけ

¹ 例えば、黄興濤「近代中国漢語外来詞語の最新研究——評馬西尼『現代漢語詞彙的形成』」、上述『文化史的視野』所収。

る新語彙の問題を取り上げたのが、リディア・リウである。彼女は、反響をよんだその著『言語横断的实践』Lidia H.Liu *"Translingual Practice:Literature,National Culture,and Translated Modernity—China,1900-1937"* Stanford University Press,1995². のなかで近代中国の外来の新名詞とそのもととなった外国の原語との間は意味内容がそのまま自然と移行するのではなく、二種あるいは多種の言語・文明間の思想観念が互いに作用しあうある種の「実践」が介在するという。外来の新名詞の思想史的な意義は、その語彙が二種あるいは多種の言語・文明間で「互訳」されるまさにその過程に始まるのであると考え、その意味で新名詞は比較思想史の研究対象になりえるのである。それゆえ我々は言葉、概念、カテゴリー、言説の間の関係のダイナミックな歴史のただなかに分け入っていかなくてはならないとする。同じような試みは、「革命」の語を扱った、陳建華『「革命」的現代性——中国現代革命話語考原』上海古籍出版社、2000年にも見える。

そのように考えると、黄氏の扱った新名詞、新概念の研究は近年の一種の「流行」であるともいえなくもない。しかし、私には黄氏の研究のオリジナリティーは確かに存在するように思われる。私のみるところ、それは二点ある。すなわち、新名詞、新概念を、第一に「一般思想史」の方法を用い、第二に近代中国における「現代性」の生成とからめて論じていることである。

第一の「一般思想史」とは清華大学の葛兆光が提唱している思想史の方法論に関する考え方である。上古から近代にいたる中国思想史すべてを扱う大部の『中国思想史』二冊(第一巻:七世紀以前,第二巻:七世紀から十九世紀)(復旦大学出版社,2001年)の別冊『中国思想史:導論 思想史的写法』で彼の考えは体系立てて述べられており、中国の学界において非常に影響力がある。『中国思想史』自体が彼の「一般思想史」の理論の実践であるといえようが、扱っている対象があまりにも長期(神話時代から日清敗戦と「公車上書」の1895年まで)、多岐(儒教・仏教・道教)にわたっており、必然的に概論的な記述も少なくなく、彼の理想とする「一般思想史」の叙述とは一体何なのかなかなか分かりづらい。しかし、単純化してみれば彼のいう「一般思想史」とは、社会生活に実際に影響を及ぼした普遍的な思想の内容を重視し、従来古くは「学案」あるいは「哲学史」のような形で語られてきた有名思想家や経典にみられる思想のあとをつなげただけの「エリート[精英]思想史」を脱却することを求めているようである。葛氏はまず一般の人々の生活世界の「知識,思想,信仰」とその「連続性」を把握する必要を訴える³。「学術史」とも異なる一種の社会思想史ともいえるべきものであろう⁴。

² 中国語訳に、劉禾『跨語際实践——文学,民族文化与被訳介的现代性』(三聯書店,2002年),部分訳(Introduction:The Problem of Language in Cross-Cultural Studiesのみ訳出)だが、日本語訳として宮川康子訳「言語横断的实践・序説」(上)(下)『思想』岩波書店,899,900号,1999年5,6月がある。

³ 葛氏の近代思想史関係の「一般思想史」の実践例の一つが、葛兆光(土屋昌明訳)『海潮音』の十年——中国一九二〇年代仏教新運動の内的論理と外的志向」(上)(下),『思想』943,944号。

黄氏はこのような葛氏の考えに基本的に賛意を表し、「一般思想史」が新名詞、新概念の研究と如何に関わってくるかについて大略次のように述べる⁵。「一般思想史」とは、さまざまな文化的な領域（政治、経済も含む）の「基礎」をなすような思想や、社会生活に普遍的な影響を及ぼすような思想、これらを把握するものである。そう考えるとこれらの思想の担い手がエリートであるか一般の人々であるかはさて問題ではなく、その思想の「基礎性」、「普遍性」なり「社会有効性」なりが問題になってくるのである。それゆえその時代の思想的な主題ともなるもの——これはその時代の基本的な価値観と緊密な関連がある——に対して深い研究を行う必要がある。たとえば「富強」「中華民族」等の観念である（これらは時代「思潮」でもある）。このような問題関心から黄氏の行なっている、外来の新名詞、新概念に着目した研究の必要性が生じるわけである。本稿でなされている「社会」概念をめぐる黄氏の分析はその一端であるといえる。

第二に「現代性」に関してである。「現代性」（モダニティ）はとりわけ欧米・中国の研究者が好んで用いる概念であり、しばしば「伝統」と対峙して用いられる。近代思想史研究の領域では、ベンジャミン・シュウォルツがつとに「伝統」と「現代性」の二項対立について精細に富んだ分析を行なっているのが注目に値する⁶。アメリカの中国研究を包括的に批判したポール・コーエンの『知の帝国主義』においてもっとも厳しい批判が向けられたのは（その第二章において）ジョセフ・レベンソン（『儒教的中国とその運命』 *Confucian China and its Modern Fate* の著者）であるが、その批判の俎上にあげられたのがじつは「伝統（tradition）と現代性（modernity）」の二項対立の図式で中国の近代思想史を見る観点であった。当然のことながら中国の「近代」は「伝統」なるものが「現代性」によって一方的に侵食されていく過程としてみることはできないのである。

とはいえ今日にいたるまで「現代性」という概念は多くの研究者によって使用され、さまざまに議論されている。とりわけ1990年代以降、「現代性」をめぐる議論はきわめて盛んであった。それらのすべてに言及する能力は今の私にはない⁷。そもそも「現代性」とは一義的に定義できるものではないわけだが、「現代性」をめぐる議論のひとつの画期が、汪暉の著名な論文「当代中国的思想状况与現代性問題⁸」（1997年）であることはおおかた異存あるまい。私のいまの関心にもとづく理解では、汪暉の議論は、大略以下の通りであ

⁴ 葛兆光「誰的思想史？為誰写的思想史？——近年来日本学界对日本近代思想史的研究及其启示」『中国社会科学』2004年第3期、において日本思想史研究とからめ、思想史研究の方法論についても論じる。

⁵ 黄興濤「近代中国新名詞的思想史意義發微——兼談對於「一般思想史」之認識」、楊念群・黄興濤・毛丹編『新史学』（上）中国人民大学出版社、2003年。

⁶ Benjamin I. Schwartz, *The Limits of "Tradition versus Modernity": The Case of the Chinese Intellectuals*, *China and Other Matters*, Harvard University Press, 1996（論文は1972年）

⁷ 吳冠軍『多元的現代性』上海三聯書店、2002年、等参照。

⁸ 原載は『天涯』1997年第5期。日本語訳は、汪暉（砂山幸雄訳）「グローバル化のなかの中国の自己変革をめざして——近代の危機と近代批判のために」（上）（中）（下）、『世界』1998年10、11、

る⁹。80年代の知識人はさまざまな意見の対立を含みながらも大部分は「新啓蒙主義者」であった。それは第三世界の一員として中国のモダニティは一貫して「反近代の近代」を標榜し、中国マルクス主義の影響を強く受けた彼らは資本主義のイデオロギーに反対するかたわら「近代化」に対し「微妙」な関係を保ってきた。しかし冷戦の終結、資本主義の「勝利」、 「歴史の終焉」等世界の構造に大きな変動を生じた90年代以降、知識人たちは深刻な分裂に直面する。かつての「新啓蒙主義者」は「自由主義者」、 「国家主義者」、 「文化保守主義者」、 「ポストモダニスト」へと分岐する一方で、「反近代の近代」という中国のモダニティの基本的性格は喪失し、「近代化」の内実に対する深い反省もないままに、「近代化」に無条件に服従することになってしまったのであるという（「自由主義者」への批判でもある）。

私のみるところ、汪暉の「現代性」をめぐる議論は、グローバル資本主義の時代を迎え、「中国」の「現代性」の歴史的性格を強調したうえで、「現代性」に対する多面的で深い省察を加える必要を促すものであったように思われる¹⁰。

また黄氏も影響をうけている杜維明（ハーバード大学）はかなり以前から「多元現代性」を提唱している¹¹。杜氏自身の「現代性」のとらえ方にもゆれがあるが、持論の「儒学の第三期発展」とからめて「西洋／中国」「伝統／近代」の枠組みを離れた独自の「現代性」を捉えようとする試みがそこにはある。

これらをふまえて考えると、黄氏の試みは、新名詞およびそれが社会文化全体に及んだ「現代性」の機能について着目した非常にユニークな視点であるといえる。黄氏の「現代性」という概念に対する定義づけのあいまいさに若干の不満は残るものの、とらえどころがなく論争のたえない「現代性」の一側面を新名詞の分析を通じてあぶり出そうとしているのである。黄氏が提起した「思想現代性」なる概念は「多元」な「現代性」の一つであるし、「現代思想舞台」もそこからの派生概念である。新名詞と「現代性」の角度から読み直してみると、近代思想史の古くからの課題である「伝統と近代」、「中国と西洋（それに日本）」、「エリートと一般の人々」等に新しい視角をもたらしてくれるように思われる。

以上の二点についてはまだ「試み」の段階にとどまっており、黄氏独自の明確な歴史像を描くまでにはいたっていないように思われる。しかし、中国の近代思想史を書きかえる上で非常に示唆に富む観点であることは間違いない。

日本でも「文明」や「人種¹²」、「宗教¹³」等の新名詞をめぐる書誌的な研究にとどまらない思想史的な分析にふみこんだ研究がすでに行なわれている。香港の金観濤氏は「社

12 月号。

⁹ 1990年代の中国思想界における「新左派」汪暉の位置づけについては、緒形康「現代中国の自由主義」『中国21』vol.9、愛知大学、2000年5月。

¹⁰ 例えば、汪暉「現代性問題答問」『死火重温』人民文学出版社、2000年。日本語訳（村井寛志訳）「近代性の問題をめぐる問答」『現代思想』2001年3月がある。

¹¹ [美] 杜維明『東亜価値と多元現代性』中国社会科学出版社、2001年、等。

¹² 石川禎浩「近代東アジア“文明圏”の成立とその共通言語——梁啓超における「人種」を中心に」、

会」や「権利」等の近代思想史における重要な「概念」を取り上げ、それらを思想的な文脈に定位するという一連の試みを行っている¹⁴。

この古くて新しい分野の研究も一種の「国際競争」の時代に突入したということなのであろう。私も積極的に参入していきたいものである。

(かわじり ふみひこ・帝塚山学院大学)

狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会，2001年，所収。

¹³ 村田雄二郎「東アジアの思想連環——清末中国の「宗教」概念受容をめぐる」，三谷博編『東アジアの公論形成』東京大学出版会，2004年，所収。

¹⁴ 「從“群”到“社会”，“社会主义”——中国近代公共領域変遷的思想史研究」「天理，公理和心理——中国文化“合理性”論証及“正当性”標準的思想史研究」「近代中国“権利”觀念的意義演變——從晚清到〈新青年〉」等々。